馬術、乗馬は コミュニケーションスポーツだ

相手への思いやりが不可欠
相手が話せないからこそ、距離を測り、よく見て接するコミュニケーションスキルが必要

二〇二四（令和六）年、パリ五輪で銅メダルを獲得し「初老ジャパン」の愛称でも話題となった総合馬術団体日本代表。

メンバー四人のうち、活動拠点のイギリスから一時帰国中の田中利幸（39）、北島隆三（39）の二人の選手（共に乗馬クラブクレイン所属）に、「イギリスの馬術、乗馬文化」「馬とのコミュニケーションの取り方」「馬に乗ること、接することで子供たちに及ぼす効果」「教育現場へ伝えたい乗馬の持つ力」など、様々な観点からお話をうかがった。

馬術の本場フランス（パリ五輪）で九十二年ぶりのメダル獲得

北島選手「やはりメダルを取るか取らないかで、周囲の反応がこんなにも違うのかと感じています。日本に戻って来て、〝おめでとう〟の言葉とともに〝ありがとう〟の言葉を多くの馬術関係者からもらいました。本当に取れて良かったなというのが現在の心境です」

田中選手「メダルが取れたのは、目標を持って馬と一緒にやっていくモチベーションがうまく機能したのかなと感じています。イギリスを拠点に活動して約十年、多くの経験値を得ることができたことに感謝しています」

イギリスは、日常に馬術・乗馬文化が根付いている

北島選手「活動の拠点はロンドンの西、車で一時間半くらいのところ。プリストルから三十分くらいの何もない田舎です。大きな高速道路があるのでイギリス国内の移動にはとても便利な場所で馬の厩舎も多いところです。馬のトレーニングが出来る施設も近所に複数あるので、クロスカントリーなどメニューによっても施設を変えています。車で走っていると、放牧中の馬をよく見かけますし、やはりイギリスは馬と触れ合える環境が整っている国だと実感します」

田中選手「日本だとやはり馬に乗ることは少し高級なイメージがありますし、やりたくてもどこにアクセスしていいかわからないという声を聞きますが、イギリスでは乗馬・馬術は日常に浸透している身近な存在です」

北島選手「私たちは御年七十五歳のレジェンドトレーナーに教わっているのですが、彼女の孫娘、まだ小学生くらいの女の子が小さなポニーに乗っています。日本では馬というとサラブレッドなどの大きな馬をイメージしますが、イギリスはポニーの乗馬文化が凄くて、ポニー競技もたくさんあります。日本でいえば〝少年野球〟のような感じで、〝ポニークラブ〟がたくさんあります」

田中選手「小さい子供が大きな馬に乗ったりすることはほとんどありません。身長によって小さいポニー、少し大きいポニーなどに乗っています。ポニークラブでは小さな子供たちも楽しそうにやっています」

イギリスの乗馬スクールや競技環境は

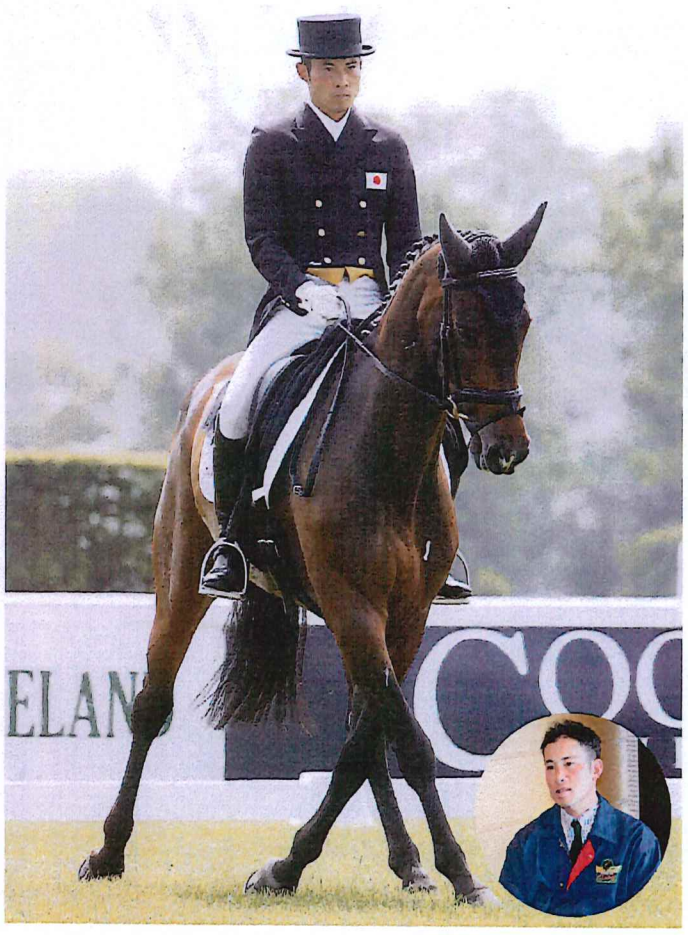
北島選手「イギリスにはもちろんクレインのような乗馬クラブもありますし、個人で厩舎を借りてやっている小規模な乗馬スクールも多いです」

田中選手「向こうでは馬術の競技会は年間三百回以上あり、いつでもどこかで開催されています。日本だとその三分の一くらいではないでしょうか。何千人もの観客が詰めかける大会もあります」

北島選手「それだけ盛んだと選手を育てるシステムも出来上がるし、スポーツとしての馬術も強くなるべくして強くなるのだと思います」

北島選手「日本では馬とペット感覚で接してしまう傾向があります。イギリスでは小さい頃からポニーを通じて親が子供にその在り方をしっかり伝えます。それぞれ馬によって個性があること、言葉を話せないので、〝相手（馬）の反応を受け取って自分が動く必要性がある〟ことを学びます。自身のことばかりではなく、まず相手はどのような状態であるかを〝察する〟ことが大切になるのです。この関係性を作っていかないと怪我をすることもあるのでかなり厳しく教えられます」

田中選手「やはり思いやりが不可欠ですね。人間は話せますが馬は話せません。馬の置かれている環境、その表情などからコンディションなどを察し、よく見て考えて接してあげる。そういったコミュニケーションスキルが必要ではないかと。これは人と人との関係にもあてはまるはずです。私が今まで乗ってきた沢山の馬たちも一頭一頭、個性が違いました。体格や運動能力も様々ですが一番はそれぞれの性格の違いです。こんな場面で怒るんだな、とか、褒めると動きが良くなるんだな、といったところでしょうか。相手を深く知っていくと、瞬間、瞬間で話せるようになる。こうなると本当に可愛いです。二人で一つ。馬との相性や関係性で競技成績も大きく変わります」



パリ五輪 総合馬術団体 銅メダリスト 田中利幸氏

二人で一つ。だからこそ誰よりも相手（馬）のことを思い、真剣に向き合う

始めた切っ掛けは、〝言葉の交わせない相手（馬）に伝わる〟ことの嬉しさ

北島選手「私は小学校五年生の時に競馬ゲームにはまって（笑）、ジョッキー（騎手）という職業を知って憧れ、馬に乗ってみたいと思い、地元（関西）の乗馬クラブ（クレイン）に入会しました。とにかくレッスンが楽しかった。少しずつ馬を乗りこなすことができた達成感もありました」

田中選手「私は中学三年生の時に乗馬体験をした時に、自分の合図で歩くとか少し小走りすると、言葉がなくても伝わる感覚に『これだな』って思いました。嬉しかった。そこから馬術部のある高校に行きたいなと思って福岡のクレインに通いました。もともと動物が好きだったのでそれもあると思います」

乗馬クラブでの馬との関りが自分という人間を作ってくれた

〝自分のことより相手（馬）や仲間のことを思うことが出来るか〟

北島選手「学校にいけば同年代の顔見知りの友達ばかりですが、クラブでは性別、年齢も違う様々な人たちとのコミュニケーションが必要でした。でも共通の話題は皆さん大好きな馬の話だったので自然と年齢に関係なく人と話せるようになりました。馬と接する時に相手（馬）を注意深く観察して表情やコンディションを見るのですが、それは人と人との関係にも当てはまることだなぁと思います。自分で言うのもなんですが、どちらかと言えば聞き上手な方だと思っています。大きなコミュ力がついたというか、自分という人間が作られたと思います」

田中選手「乗馬レッスンは年齢別ではなく乗馬技術のレベル別でのグループレッスンです。クラスが上がると周りは大人の方ばかりでした。馬に乗るのが好きだったので休みの日も同年代の子供たちと遊びに行くよりも、乗馬クラブに遊びに行ってました。大切なのは馬を知ること。相手を知ろうと思わなければ、当然ながら二人三脚での競技など決して出来るものではありません」

相手（馬）の状況を察する適切なコミュニケーション

近い関係だからこそ心掛けたいことがある

北島選手「朝起きて、厩舎に行くと馬の雰囲気でその日の気分がわかります。呼びかけた声への反応、耳の動きや視線、自分への近づき方など、長い時間を過ごしているからこそ気が付きます。ある意味では毎日一緒にいるゆえに気を遣わないというか、どうしてもトレーニングを詰め込み過ぎちゃうことがあります。やりすぎて馬に負担をかけてしまい怪我につなげてしまった経験もあって。馬に頑張らせること、逆にやり過ぎて怪我や故障をさせないことの葛藤が常にあります。馬とのコミュニケーションを通じてそのあたりを上手にコントロールすることも、たくさんの経験から判断することが出来るようになってきました。馬との関係をまた一つ太いものにし、信頼を強くすることを心掛けています」

田中選手「馬の体調や状態も良い時もあれば悪い時もある。人間も同じで人の生活は良い時ばかりではない。悪くても口に出さない場合もある。人間はそんなに簡単ではないでしょう。相手の様子を普段からよく見て、元気になるような調教をしてあげるように心がけています。特に辛い局面では頑張ってくれたら共に喜び合い褒めることが大切です。過去の失敗や反省からうまくいかない時は、二人で（自分と馬で）基本に立ち返り、シンプルなトレーニングから始めるようにしています。友人同士で言えば、〝おはよう〟、〝ありがとう〟、といった声がけに始まり、休み時間に話をしに行くとか、一緒に下校するといったことになるでしょうか。馬との関係は、人とのコミュニケーションにもピッタリあてはまると思うのです」

日本の教育現場における部活動として思うこと

民間乗馬クラブが学校の馬術部設置へどのように貢献できるかが課題

北島選手「日本の大学は全国に八十以上の馬術部がありますが、高校は少ないです。私の高校（奈良）にも馬術部はありません。ゴクゴクと喉を鳴らしながら美味しそうに飲む姿を見て、水を与える子供たちはとても嬉しそうにみえる。それは人に対しても〝相手の立場を思いやる〟といった優しい気持ちを醸成するということにもなるかと思います」

北島選手「娘が通う小学校に先日、講演に行ってきました。馬術競技のルールは知らなくても、ポニーに乗ったことがある、馬が好きという子供は多かったです。だからこそ、もっと馬と接する機会を増やせたらと感じます。生きづらさの叫ばれる今の時代、もしそういった特別な体験学習の機会が設けられるとしたら、小学生から大学生、また教師の方々にまでも、特別な意味を持つ有意義な場面になると信じています」

田中選手「夏の季節であれば、乗馬クラブでは自分たちのレッスン後に、自分の水分補給より先に、乗った馬に水をあげます。ゴクゴクと喉を鳴らしながら美味しそうに飲む姿を見て、水を与える子供たちはとても嬉しそうにみえる。それは人に対しても〝相手の立場を思いやる〟といった優しい気持ちを醸成するということにもなるかと思います」

教育現場には情操教育としての乗馬の良き側面も訴えたい

二人の選手のインタビューからは、今まであまり感じることの出来なかった、馬術・乗馬の競技以外の魅力的な側面、それも教育に活かせる大きな一面を見ることができたように感じた。

今後、日本の教育の現場に活かせることを期待したい。

パリ五輪 総合馬術団体 銅メダリスト 北島隆三氏

乗馬クラブは人間作りの場
世代を超えた交流から、内気な自分から積極的に行動する自分が作られた